居住地域におけるもうひとつの居場所の形成
― 自宅開放事例にみる運営・使われ方実態調査から ―

大橋 寿美子[a]　志村 結美[b]

[a]湘北短期大学生活プロデュース学科　[b]山梨大学教育学部

【抄録】

近年、家族機能の弱体化、家族関係の変化とともに、地域の社会的サポートネットワークが崩壊してきている。そのような状況の中で、住宅の一部を地域の人へ開放したり、空き住居や店舗などのストックを利活用した、地域の中での居場所づくりやネットワーク再生の取り組みがなされ、一部では成果が認められている。本論では、「まちの縁側クニハウス」を対象事例としてヒアリング及び使われ方調査を行った。子供～高齢者、障害者など日に平均 10 人程度の利用がみられ、お茶を飲んだり、遊びや勉強などの多様な行為がみられ元看護師の経験を活かして、育児などの相談や障害者家族の交流会などが行われていた。設立目的である気軽に立ち寄れるもうひとつの居場所になっていることを確認した。

【キーワード】

サードプレイス　居場所　コミュニティ

1. はじめに・背景

家族機能が弱体化した少子高齢社会では、家族や一住宅一住戸を超えて、人と人とがつながるしくみづくりが必要である。子どもや高齢者はもちろん、誰もが日常の役割や利害関係から解放され、気軽に誰かと会話したり、交流を楽しむことができる住宅や職場以外の場所として、もうひとつの居場所（以下、サードプレイス[注1)]）が着目されている[注2)]。

そもそも日本には、井戸端、居酒屋、銭湯、神社や寺など、気軽に何気なく立ち寄ってたわいない会話を楽んだり、顔見知りになるなど交流を深める場所が多数存在していた。これらの空間はリフレッシュし、人と人とを自然につなぐ生活領域にあるコミュニケーションの場となっていた。しかし、戦後郊外住宅地の開発によって、余白のない住宅のみで構成される画一的な住宅地が各地で作られ、戦前まであった街中のさまざまな居場所が減少した。このことは多様な世代や背景の人とつながりの減少をも意味し、ストレスが解消しにくい、血縁や職縁以外の人との関係が生まれにくい、地域の人と人とのコミュニケーションが希薄になるなど、さまざまな問題を引き起こしている。

現在、人が集まる交流の場として公共の施設では、公民館やコミュニティセンターなどがあるが、現状では数・質・規模的に多様なニーズに対

＜連絡先＞

大橋 寿美子　ohashi@shohoku.ac.jp

応することは難しい。近年では、空き店舗などの既存建物ストックの利活用や自宅の一部を地域への開放、コミュニティカフェなど、NPO法人や任意団体および個人が設立し運営する、居住地域での交流の場が各地にみられるようになってきた。公共の施設とは異なり小規模で、資金的にも厳しく、素朴な空間ではあるが、設立者や運営者個々の工夫により、親しみやすい居場所が形成されている[注3)]。

本研究では、各地にみられるサードプレイスの事例の運営や空間利用の実態と課題を明らかにする。さらに調査結果から得た知見を活かして、居住地域のコミュニティ再生の一端を担う、サードプレイスづくりの実践を予定している。さらに実践を通して、空間のつくり方と利用の関係および運用方法などを検証し、居場所づくり促進のための情報発信などの普及活動を行う予定である。複数の居場所の利用により、さまざまな年代や背景の人とゆるやかにつながることで、人々が心の平穏を保ち前向きで活気のある社会の一助になることが本研究の最終的なねらいである。

本論では、一連の研究の第一報として、名古屋を中心に30か所程確認されている「まちの縁側」、その第1号である所有者発意である自宅開放事例として「まちの縁側クニハウス」、を対象として運用実態調査を実施した。設立趣旨、設立経緯、運営方法、空間特徴や利用実態などから、サードプレイスづくりの一手法を明らかにする。

2. 調査概要

対象事例は、「まちの縁側クニハウス」,「まちの学舎ハルハウス」以下の2事例である。

「まちの縁側クニハウス」を対象事例として、2009年11月、2010年8月に実施した。設立者で代表理事の丹羽國子氏とスタッフへのヒアリング調査と観察調査を実施した。

3. 建設概要・立地環境

建設概要は表2のように、名古屋市千草区高見、最寄駅から徒歩約5分で幹線道路から一本入った閑静な住宅地にある。以下に立地の特徴と、関連するクニハウスの利用を以下に整理する。

- 近年は、幹線道路沿いに、おしゃれな飲食店が増える
- 国鉄の官舎が建ち、子どもから高齢者まで、様々な世代の居住地域であった
- 現在は国鉄の官舎は新たに民間の集合住宅に建て替えられ、人口が減少し、まちも居住者層も徐々に変化してきて、クニハウスの利用者も減少しつつある
- 前面道路は小学校への通学路で、子供たちが帰り道に　クニハウスに立ち寄る光景は今も健在である
- 高見は犯罪が少なく、クニハウスの存在は安心のシンボル、お巡りさんも相談にくる

表１　調査概要

対象事例	まちの縁側クニハウス
対象期間	２００９年１１月、２０１０年８月 ２０１２年９月
調査対象者	代表者　丹羽國子氏、スタッフ４名
調査方法	観察調査、ヒアリング調査
調査内容	・設立趣旨 ・設立経緯 ・運営方法 ・利用実態 ・空間の使われ方

表２　建設概要

所在地	愛知県名古屋市千種区高見
	地下鉄東山線「池下」駅より徒歩5分
建物種別	一戸建て
建物用途	個人住宅
構造	鉄筋コンクリート造２階建
面積	敷地面積　約１３０㎡ 建築面積　約 ６７㎡ 延べ床面積　約１３０㎡ １階　７０㎡（前庭含む）、 ２階　６０㎡　裏庭　約２５㎡
築年数	約４０年　（購入年１９７０年）
改修年	１９９９年　（改修後１２年）1階

図１　外観写真

図２　前面道路写真

図３　近年建設された民間の大規模集合住宅

図４　最寄駅からの地図

4.　空間特徴と利用実態

図5に平面図と空間の使われ方を示した。具体的な内容は以下にまとめた。

4. 1　空間特徴・空間利用実態

クニハウスの空間特徴は以下の4点があげられる。

・全面道路から視線が抜け室内の様子が見える
・くつを脱がずに奥まで入ることができる土間空間がある
・くつろげる畳の小上がりのスペース がある。

・池や緑がある庭がある
・玄関から裏庭まで風が抜ける

これらにより、前面道路を歩いている人が建物内の気配や誰がいるか見ようと思えば見れる、気軽に立ち寄りやすい空間となっている。

次に、空間利用の実態調査の結果を以下に示す。

・近所の子ども～高齢者、障害者など平均日に10人程度の利用がみられる
・12年間で延べ約1700人
・利用者の行動パタン---道路からハウス中をのぞき、お気に入りのスタッフみつけて入って来る
・小学生が学校帰りにおしゃべりや勉強する（スタッフと大学生などと）
・育児や健康の相談に来る・障害者施設に通っている子どもが遊びに来る、親が相談に来る
・名古屋市立大学の学生がゼミで利用する
・収穫した野菜やお菓子など食べ物を持ち寄り分けあい、お茶や昼食を共に作り食べる
・近所のお巡りさんが安全相談に来る
・教室（パンの花教室など）を開く
・クリスマス会などのイベントを行う（イベント時には50人以上参加）

図５　平面図・空間の使われ方

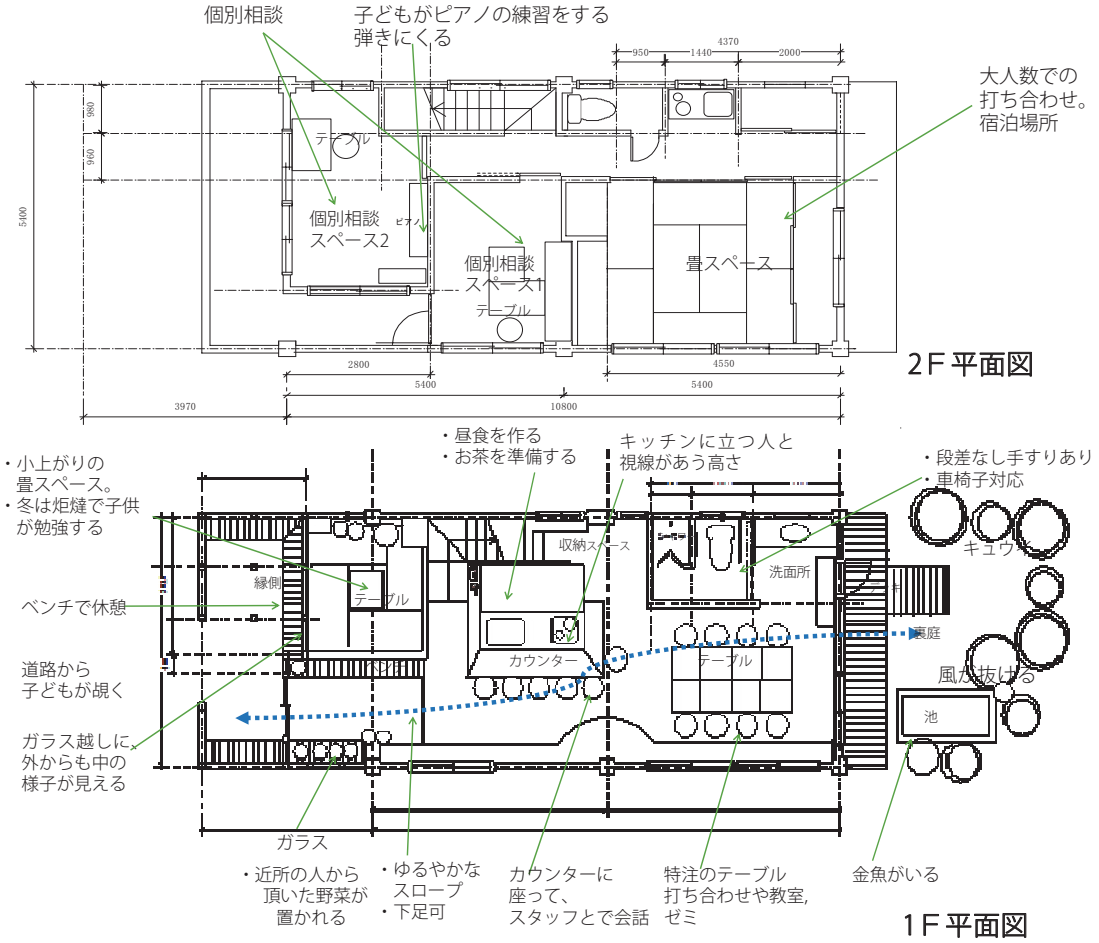


図６　土間と小上がりから前面道路をみる

図７　キッチンと奥スペース

図８　小上がり畳スペース

図９　打ち合わせ・グループスペース

5. 設立経緯と運営方法

5.1　設立目的

代表理事の丹羽氏は、老いた者が次の世代に何を遺すかの回答として「地域に美田を遺す」、世代間交流の機会を多くして「生活の智慧を伝える」の2つを導き出した。その具体的活動として、「まちの縁側クニハウス」を、さらに2010年に「まちの学び舎ハルハウス」を設立した。

5.2　自宅一部開放から自宅全面開放までの経緯

丹羽氏は、元看護師の経験を活かして、誰もが気軽に会話を楽しみ、相談できる場所として自宅の一部開放していた。その後、自身は近所に引っ越し、現在の全面的な地域開放空間とした。1999年に一般財団法人とし、さらに京都に「まちの学び舎ハルハウス」をつくる。

5.3　運営方法

開放日時、運営スタップや体制、セキュリティなどは以下にまとめられる。

〈開放日時〉

月・火・水・金・土曜日　10～16時

日曜、祝日、木曜、お盆休み、年末年始は休館

・悩みの相談：あらかじめ予約
・健康相談：月、火、土

〈運営体制と方法〉

・ボランティアスタッフ30名（20代から70代、スタート時は6名から）により運営
・丹羽氏の看護婦仲間や、以前からボランティア活動をされていた知り合いの方
・交代制で常時2名の決められたスタッフがいるが、当番ではない日に来る人もいる
・利用者が多い時には、向かいに住んでいるおばあさんがに昼食を作りに来てくれる
・スタッフ会議：月1回開催している。問題になるようなことはほとんど起きてない
・セキュリティ：スタッフと頻繁に来る学生や町内会長にも鍵を渡しており、自由に使えるようにしている

図10　利用の約束事項の抜粋

■約束ごと（パンフレットより）
・ここに集う人はすべて対等です。年上を敬い年下には大らかに、笑顔であいさつしましょう。
・政治・宗教の勧誘を禁じます。
・足跡以外は何も残さぬよう、清潔に心がけ使用しましょう。
・節水・節電（省エネ）にご協力ください。
・整理・整頓に心がけましょう

5.4　運営資金

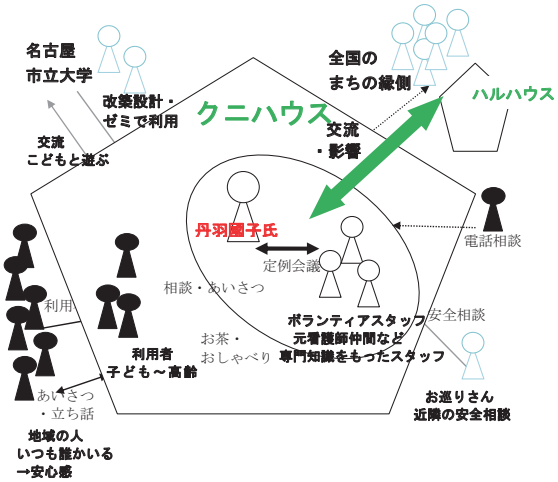
設立当初は丹羽氏の自己資金で運営し、現在はボランティアスタッフの積立金やクニハウスへの支援者、見学者、相談者らの寄付で賄っている。

グループ利用の場合のみ、高熱・上下水道・エアコン費は実費を受けとるほか、利用代はもらっていない。基本的に食べ物や本などは利用者が持ってきてくれ、水光熱費や電気代など合わせて等に毎月1～2万円の出費がある。なお、建物の所有は丹羽氏である。

6. ネットワーク

この場所での居住歴の長い丹羽さんは、多くの人により支えられてクニハウスを運営している（図11）。

図11　ネットワーク図



7. まとめ

自宅を開放した空間での、所有者発意、自己資金による居場所づくりの事例として、まちの縁側クニハウスを対象事例として調査した。その結果、地域住民が気軽に立ち寄りほっとできる「もうひとつの居場所」となっていること、さらにクニハウスの存在が地域の安心感につながっていることが確認できた。居場所が形成された要因として以下のことがあげられる。

①看護師などの実績に裏打ちされた代表者やスタッフで運営され、利用者や地域住民に安心感を与え、信頼できる存在である。

②小学校への通学路であることや近隣に様々な大学があり、子どもから高齢者まで居住している地域である。多世代の交流が生まれやすい立地である。

③道路から中の様子が伺える透過性をもつなど、
　気軽な立ちよりを誘発する空間特性がある。

クニハウスのこれからの課題は、街の変化に伴う子どもの数の減少傾向にどのように対応し継続していくか、である。

　今度は丹羽さんが主催するもう一つのまちの縁側である「まちの学び舎ハルハウス」の実態や、各地でのサードプレイスの事例や実践事例などについて報告する予定である。

【謝辞】

　調査にご協力いただいた、丹羽國子氏、クニハウスのスタッフの皆様および利用者の皆様に深く感謝致します。

※本研究は、財）住宅総合研究財団　高齢者居住委員会にて行った調査をもとに、分析・考察したものである。

【注】

1　アメリカ社会学者 Ray Olden Burg の著書『The Great Good Place 』（1989）で示された新しい都市の居場所の概念である。自宅や職場について重要となる場所で行きつけの場所を示す。
2　2010 年 4 月の株式会社ドゥ・ハウスのインターネット調査によると、サードプレイス（もう一つの居場所）を想起できた人は精神的なゆとり、友人の数が多い傾向があるとしている。また参考文献 2 では、まちの居場所づくりが草の根的に増えてきていることなど実態をまとめている。
3　参考文献 3 にて、自宅を地域に開く事例、地域の中の拠点となる事例など筆者らが調査し、さまざまな居場所を確認した。

【参考文献】

1　Ray Olden Burg『The Great Good Place』DA CAPO PRESS（1989）
2　日本建築学会編『まちの居場所』東洋書店（2010）
3　高齢者居住委員会『住みつなぎのススメ』朋文社（2012）

Formation of the alternative place in dwelling area

- Survey of the operate and current living conditions of open houses for people in the local community -

Sumiko OHASHI　Yumi SHIMURA

【abstract】

In recent years, with weakening of family functions and changes of family relations, social support networks in communities are breaking down. Thereupon, this study examines the creation of a third place where anyone, from a child to an elderly person, can feel free to drop by and which is neither a home, workplace, nor a school.

【key words】

The third place, A place of my own, Community